

ムヘンシャン—モスクワ放送最初の 日本人アナウンサーの軌跡

島田 顕[†]

Mukhenshan—The First Japanese Announcer of Radio Moscow Japanese Section

Akira Shimada

The Radio Moscow began broadcasting in Japanese in April, 1942 in the period of World War II. Broadcasting of the Radio Moscow to Japan was a part of the operation to evade going north of Japanese army (military action toward Soviet Union).

The first Japanese announcer of the Radio Moscow was called “Muhenshan”. Nothing was known about him excluding the fact that he came from the Kyushu region. Everything was shrouded in mystery for a long time. It is said that the name of “Muhenshan” applied “Shan” of the Kyushu dialect to “mukha” of “fly” in Russian. The individual file of “Muhenshan” was discovered in Russian State Archive of Socio-Political History (Comintern Archives, RGASPI in Moscow) and Diplomatic Record Office of The Ministry of Foreign Affairs (in Tokyo) recently. This paper intends to reproduce person’s real image (activity) of named “Muhenshan” based on these historical materials and presents future tasks.

The paper consists of three sections: first, his early life, the ship-crew period in Japan and the defection to the Soviet Union; second, his activity in Vladivostok (Food Industrial Employee Labor Union and International Seamen’s Club, etc.); third, his actions and retire in Moscow (Eastern Worker Communist University (KUTV), Scientific Research Institute of Ethnic and Colonial Problems (NIINKP) and broadcasting station (Radio Moscow Japanese Section), etc.).

はじめに

モスクワ放送は、第二次世界大戦中の1942年に、日本軍の北進（対ソ開戦）を回避させるための工作の一環として日本語放送を開始した。この放送は、まさにゾルゲ事件で明らかになったリヒャルト・ゾルゲを中心とするスパイ・グループの活動と表裏一体をなすものといえよう。

モスクワ放送は、ソ連時代、特に冷戦期に、共産主義プロパガンダ放送として一役勇名をはせた。同時に、科学、文化、芸術など、ソ連・モスクワの生の姿を浮き彫りにし、米ソ宇宙開発競争の時代には、「ソユーズ」宇宙船や宇宙遊泳という言葉は初めて世に放ったといわれている。1980年代には、日本でBCL（ブロードキャスティング・リスナー、海外放送を聴取する趣味）のブームが起きたため、放送に耳を傾けた諸氏も多いのではないだろうか。

[†] 早稲田大学アジア太平洋研究センター特別研究員、関東学院大学講師

ソ連崩壊の後、放送は共産主義のプロパガンダの役割を終えた。モスクワ放送から「ロシアの声」放送と名称を変えた。財政難から何度となく存続の危機を迎えるが、ロシアと日本の友好の架け橋として、現在も変わらず、日本語番組を日本に送り続けている¹。

私自身はこの放送局に1996年から2001年まで在籍し、翻訳とアナウンスの業務に従事した。その間、1997年の日本語放送開始55周年の記念番組作りにも参加した。その際、日本語放送開始当初の話を先輩から聞いた。当時、翻訳業務とアナウンス業務は、別々の者が担当しており、翻訳を担当していたのが、日本人共産主義者であるオカノとして知られていた野坂参三の妻であるキム・シャンこと野坂竜^{りょう}だった。

当時外国人は、モスクワの都心のホテル・ルクス（後にツェントラーリナヤ・ホテルと改称する）に住まわされていた。当時のモスクワ放送は、そこから10分程離れたプーシキン広場の近くにあり、徒歩で職員がロシア語の放送用原稿をホテルに届け、翻訳者によって日本語に翻訳された原稿を取りに行くというのが常だった。持ち帰った日本語原稿は、当然のことだが、日本人アナウンサーを通して日本に向けて放送されていた。

アナウンスを担当したモスクワ放送最初の日本人アナウンサーは、ムヘンシャンという名前で、九州地方出身者という以外は何もわかっておらず、長らく謎の人物とされていた。ちなみにムヘンシャンの名前の由来は、ロシア語のムーハ（ハエ）に、「～さん」をあらわす九州便の「しゃん」をつけたものといわれている。

当時ソ連にいた日本人は、自分が日本人である事を公表できず、朝鮮人名、あるいは中国人名を名乗って生活していた。ムヘンシャンのように朝鮮人でもなく中国人でもない名前を名乗ることはまれであった。朝鮮人風、中国人風ではあるが、朝鮮人、中国人にしてみれば、この名前が自分達の民族のものではないことは明かであったに違いない。

このムヘンシャンの個人史料ファイルが最近になって明らかになった。それによれば、ムヘンシャンの本名は緒方重臣^{おがたしげおみ}、九州福岡県出身であり、放送局内の「伝説」とも一致する。さらなる調査の結果、日本でも外務省外交資料館で史料が発見された。本稿は、これらの史料とともに、ムヘンシャンという人物の実像（活動）を再現するとともに今後の課題を提示することにある。

【1】 史料の発掘まで

このムヘンシャンの個人史料ファイルは、モスクワのロシア国立社会政治史文書館（RGASPI、略称ルガスピ、ソ連時代はソ連共産党中央委員会附属マルクスレーニン主義研究所中央文書館、ソ連崩壊後はRTsKhIDNIロシア現代史史料保存研究センターと改称され、さらに現在のRGASPIとなった）で長らく保管されていた。ソ連時代から、国別に目録、個人別にファイルを作成し、関係書類を保存するのが慣例となっていた。

個人ファイル自体は、以前からその存在が知られており、何度となく調査が行われた。しかし、その全貌が明かにされることはなかった。理由は個人のプライバシーにかかわるということだったが、これは口実に過ぎなかった。ロシアの文書館は、ロシアの国益を害する恐れのあるものは公開しないという

原則に基づいて行動していた。だからこれらの文書も公開しなかったのだ。一部の個人ファイル史料が公開されることがあったが、分類番号などの所在が伏せられたままだった²。

ソ連崩壊後、文書館の公開原則も徐々に緩和されていく傾向にあるが、個人ファイル史料については依然として厳しく、閲覧できないままだった。近年になって、個人ファイルも公開されるようになってきたが、目録は公開しないという変則的な公開となった。公開されても文書の検証は困難だった。要するに、有名な人物で、個人ファイルにある可能性がある人物については、人物を特定し、その番号を尋ね、閲覧も可能になった。だが有名ではない人物については、それも不可能であった。

ところが、近年の文書館のネットワーク化により、RGASPIも外国の文書館、図書館と提携を結ぶようになる。それにあわせて史料の電子化が進められ、RGASPIのコンピュータ史料と検索閲覧システムは、海外にも広められることになる。ワシントンにあるアメリカ議会図書館 (CL) のヨーロッパ・リーディング・ルームにも、ロシア語コンピュータ端末が導入されている。ここでは、RGASPI史料のすべてではないが、一部史料が閲覧できる。いずれは、すべてのRGASPI史料がCLで見られるようになるのだろう。現在は一部史料に加えて目録もCLで閲覧できる。

おまけに、CLではロシア語コンピュータ端末を自由に使うことができた。このことはRGASPIでは不可能だった。またRGASPIでは不可能であった個人ファイルの目録の閲覧も、CLではできる。つまり、CLでどの人物がどの番号のファイルに分類されているかを突き止めて、RGASPIでそのファイルを閲覧する。こうして、無名の人物でもファイルが存在すれば、その番号をメモし、RGASPIで閲覧請求し、閲覧することもできるようになった。

CLで、RGASPI内日本人個人ファイルは、RGASPI, F.495-OP.280.にあることがわかった³。ファイルの総数は661個、空き番号を除き実際には623個のファイルがある。有名人物では、昭和天皇裕仁からはじまって、大正から昭和初期、戦後期の政治家、政治活動家、社会活動家、文化活動家に至るまで、ファイルは多岐にわたる。

一般には全く知られていない活動家を含む、約360人は、人物名を特定出来るが、約260人はまったく無名の人物で、特定すら出来ない人物である。日本語の名字のみのものもあり、偽名や活動家名と思われるものもある。中には、活動家名として日本人が名乗っていたと思われるロシア語の名前もある。

こうした無名の人物、特定のできない人物ファイルの中に、ムヘンジャンのファイルがあった。ムヘンジャンのファイルは、RGASPI, F.495-OP.280-D.271-LL.1-28.にあることがCLで確認され、RGASPIで閲覧することができた⁴。また、同時期に私が調査していた日本人の活動家で、粛清犠牲者の一人である健物貞一⁵の個人ファイル史料 (RGASPI, F.495-OP.280-D.188-L.6.) から情報を得ることができた。そもそもムヘンジャン=緒方重臣だという証拠は、健物貞一ファイルの中にあった。ここに、ロシア語で「ムヘンジャン」、漢字で「緒方重臣」と記されている。これにより、ムヘンジャンの本名の漢字表記が特定された。

この漢字名を、アジア歴史資料センターのHPにある検索システムで検索したところ、一件ヒットした。その史料は、外務省外交史料館の史料 (外務省外交資料館>外務省記録>F門・交通、通信>1類・交通>2項・海員>本邦汽船乗組海員脱船其他事故雑件・第一巻、浦塩ニ於テ脱船シタル船員ニ関スル

件、以下外交資料館緒方重臣関連史料とする)の中の船員の亡命記録、いわゆる脱船記録というもので、これから日本でムヘンジャンの動き、脱船後の日本側の対応(身元調査依頼)がわかった。

これらの史料をもとに、以下生い立ち、脱船、入ソ、入ソ以降のウラジオストク、モスクワでの活動、退職以降とムヘンジャンの軌跡を追う。

【2】 生い立ちから脱船・入ソまで

ムヘンジャンこと緒方重臣は、明治21年(1896年)4月21日生まれ、福岡県田川郡彦山村出身。ロシアで見つかった史料では故郷の住所である彦山を「ホゴヤマ」(L.2.)と記述しているが、おそらく、正確な住所を知られたくないためにこのように述べたのだろう。当時の正確な住所は、外務省外交資料館緒方重臣関連史料からわかった。

母方の祖父が都市地方自治体職員で、父親が旅館経営者の家庭に育った。父親とは折り合いが悪く、家にも寄りつかないほどだった。その理由は、父親が母親に対してふるう暴力だった。これがもともと母親は実家に帰り、別居状態が長く続き、ムヘンジャンも佐賀県佐賀市の母方の祖父母のもとで育てられる。

祖父の死後、生活が苦しくなり、ムヘンジャンも鉱山に働きに出る。母の訃報も、鉱山にいたときに知ることになった。父親は母親の死後、女中を後妻に迎えた。ムヘンジャンにとっては継母ということになる。このことに激怒したムヘンジャンは、継母を殺害しようとして、夜間に襲うものの、あやまって父親に怪我をさせ、警察沙汰になってしまう。この後、祖母も亡くなり、天涯孤独となったムヘンジャンは船員として働き始めるのである(LL.17-28.)。

学歴では、ムヘンジャンは1914年まで、日本の尋常小学校、尋常高等小学校で学んだ。その後18歳まで、農業中学校で学ぶ。1914年から17年まで鉱山労働者[炭鉱労働者]、18歳から21歳まで荷役労働者、雑役夫として働く。1921年に歩兵予備役として登録されたが、召集検査のみで軍務は行われなかった[軍事教練は行われなかった](L.2,LL.17-28.)。さらに、外交資料館緒方重臣関連史料では、「神戸関西中学三年修行シタルモノ」となっている。

召集検査後、遠洋航路の様々な日本船で釜たき[ボイラーマン]、荷役労働者として働いた。ムヘンジャンは、船会社を転々としている。一つところにとどまることはなかった。このことが、彼の性格によるものなのか、それとも船員という職業の性質によるものなのかわからない。

ムヘンジャンは、以下の各船会社に所属している。青木汽船(佐世保)、山下汽船会社、大阪汽船会社、マキタ汽船(神戸市)、「ハシモト」汽船会社所属(神戸市)、「シンバ」汽船会社(神戸市)、「ニツィヨシ」汽船会社(神戸市)、「マンセイ」(万成)汽船会社(神戸市)。また船員で訪れた先は、国内では徳之島、八幡浜、神戸、大阪近郊のワカマツ地区。外国および外国の都市(港)では、ウラジオストク(召集検査前は一度のみ)、アメリカ航路のシアトル、ダゴマ、カナダ航路のバンクーバー、香港航路で香港、マレー諸島、シンガポール近辺のジョホールシュール、アメリカ、樺太、台湾、太平洋水域、ヤンジ川沿いの中国諸港、南京、ジュツァン、ハンコウ[漢口]、上海、日本航路、ヨーロッパ航路のドイツ・ハンブルグ、ベルギー、イギリス、地中海、アレクサンドリア、スウェーデン、ボンベイ(インド)だった。

扱っていたのは、鉄鉱石（製錬工場で荷下ろしのため）、木材だった。また漁船での漁労作業、帆船での曳き船人夫の作業にも従事した（LL.17-28.）。

ムヘンシャンは、船員時代に労働運動に携わっている。自船ではないが、4回程ストに参加したことがあった。逮捕は一度だけあったが、収監されたことはなかった。また船員の労働組合である日本海員組合に加盟した。基本的には無党派であり、政党に所属したことは一度もなかった（LL.17-28.）。

日本の警察による尋問の際、ウラジオストクからアジテーションビラを運ぶこと、それらを警察に引き渡すことを承諾した。結局はこの約束を実行することはなかった。後述するように、ムヘンシャンは粛清の恐怖を体験するのだが、それは入ソ以前の「警察の犬」「スパイ」となることによるものではなかった。父の職業を偽ったことによるものだった。むしろスパイの方が重いものといえよう。もちろんスパイ行為を行ったわけではなかったが、疑われても仕方のない態度を取ったことは事実だ。なぜなら、スパイ活動を口実として、実際に大勢の活動家が粛清されているからである⁶。

船員時代は豪放磊落の生活を続けていたようである。金を得ればすぐ使ってしまうという、宵越しの金を持たない生活だった。まさに「飲む、打つ、買う」に明け暮れた生活だった。このことは、外交資料館緒方重臣関連史料でも明らかになっている。帰省したときの話が、「郷里ニ於テ尋常高等小学校卒業後家業タル農業ニ従事シ居リタルモノニシテ性活澆金錢ヲ浪費スル傾向アリタルモノ」、「原籍在住中ハ思想傾向ニ付特記スベキモノナシ二年ニ一回位墓参ノ為帰省シタル当時ノ言動ニ依レバ『相当ノ収入アルモ悉ク友人ニ分与スル』ト得意ノ如ク語り居リタルト云ウ」と伝わっている。

【3】 ウラジオストクでの活動

1929年11月21日に、当時船員として働いていた万成汽船の興和丸から脱船した。理由は本人が明かにしている。船員として、船長になりたいという夢を一時は抱いたこともあった。だが船員の生活の厳しさを身を持って体験する。実際は給料がわずかで、船主に借金しなければ生活できないほどだった。毎月借金の返済で給料の大半が消えていく。残った僅かな金も、希望の持てない生活により、やけくそで遊興に費やされた。やる気の無さを感じ、人生に目標の持てず、自殺も考えたという。

そのようなときに、『プロレタリア・イズヴェスチャ（プロレタリア報知）』を読みはじめた。この『プロレタリア・イズヴェスチャ（プロレタリア報知）』は、ウラジオストクで日本人船員向けに発行されていた日本語新聞と考えられる。内容は恐らくロシア語記事の翻訳だろう。この新聞で、まさに、自分の状況と同じような状況が世界にあることを知り、そのような人々を助けたいと考えるようになった。ヨーロッパ航路から戻ったとき、借金はさらに増え、どうしようもない状況に陥った。そこで、何をなすべきか考え、国際海員クラブのメンバーに相談した。ロシア語を学び、社会主義を学び、活動家になることを決意したのである（LL.17-28.）。ただし、日本外務省外交資料館緒方重臣関連史料によれば、別の理由も記されている。

興和丸ハ浦塩内地間ノ航海ニ従事シ居ルモノニシテ本年度ノ最終概トシテ客月四日裏塩ニ入港セリ
同船ハ当時外港ニ碇泊シテ木材積取ニ従事シ居リタルモノナルガ緒方重臣ハ同月二十一日晝食後単

身上陸シ其後全ク行衛不明トナリタルモノナリ 緒方ハ船内ニ於テハ屢々他人ト論争シ酒癖アリテ一般船員ヨリ排斥セラレ常ニ単独ニテ行動シ居リタリ本名ハ別ニ思想的ニハ容疑ノ点ナキガ如ク海員俱樂部又ハ宣伝員トノ交渉モ認メラレザリシガ浦塩上陸ノ際ハ常ニ南京町ノ支那人ト [交渉シ居リタル点ニ] テ本名ハ支那語鮮語及英語ニ通ジ居リタリ、脱船ノ目的ハ金ニ [中略] 上陸ノ際泥酔ノ余リ支那人ニ殺害セラレタルモノニハ非ズヤトモ思料セラル

スプラフカによれば、借金からのがれ、学ぶ可能性を得るために、まずウラジオストクの国際クラブ [国際海員俱樂部] に残り、ウラジオストクでは日本人労働者の間での労働組合の路線に沿って活動したとある (L.2)。

だが本人の上申書 (LL.17-28.) によれば、食品産業労働組合での活動にまず従事した。食品産業従業員組合の日本人セクションに加盟し、日本人労働者の間での活動のため、カムチャッカに赴いた。カムチャッカの日本人季節漁師の間でのアジテーターのための養成講座で学び、リュリ、キクチクというカムチャッカの漁業利権企業内で、食品産業従業員労働組合日本人セクションの職員として働いた⁷。

その後ムヘンシャンは、一時活動を離れ、ソ連各地を視察のため訪問する。同行したのは同志テラダと日本セクションの3人の日本人同志たち、キシ、ヤマグチ、ヤマダ、そして食品産業従業員労働組合のロシア人指導者だった。彼らとともに、モスクワ、レニングラード、ハリコフ、バクー、トビリシ、バトゥーミ、クリミア、オデッサ、ドネツストロエ [ドネツク?], ドンバス、スヴェルドゥロフスクを訪問した。

その後キシ (テラダもか) はモスクワにとどまり、ムヘンシャンとヤマダ、ヤマグチと食品産業従業員労働組合のロシア人指導者はウラジオストクに戻る。この旅行に際し、テラダの旅行参加者の選抜を官僚主義的と批判している。またこの旅行中に、あるロシア人女性と知り合ったが、金がなくなり、質屋で換金するために女性に時計を渡したら、女性は戻らなかったという (L.15.)。

1932年になって、キクチク、オーゼルナヤ、リュリの漁業利権企業内で、日本人漁師に対する非合法活動を行う。同年、食品産業従業員労働組合から離れ、失業状態となる。そこで国際海員クラブ日本人部に助けを求め、国際海員クラブで活動するようになる。1933年5月から8月まで、ニコライフスク・ナ・アムーレ近くのマゴの国際海員クラブ支部で活動し、その後ウラジオストクに戻り、一時的に国際海員クラブ寮管理人となり、東邦少数民族共産主義大学 (KUTV, 世界中の共産主義者を受け入れ、養成するための機関、略称カートベ) に入学するために、モスクワに旅立つ (LL.17-28.)。

ところで、国際海員クラブとはどのような組織なのだろうか。また国際海員クラブを含む国際委員会とは何か。そもそもこれらの組織は国際労働諸組織に分類されるもので、国際労働諸組織は、プロフィンテルン (赤色労働組合インタナショナル, コミンテルンに付随するインタナショナルの一つ, 労働組合部門) に付随する形で1921年7月に結成される。やがてプロパガンダと諸活動の国際委員会 (MKPD, インターコム) ができ、様々な組織の統一を図る。プロフィンテルン第2回大会 (1922年) 後、さらに労組統一のためにそれらの諸組織は尽力する。共産党を中心とする労組 (統一労組) 作りのためである。そしてこれらに対し、1931年以降、国際委員会、インターコムという名前が用いられるように

なる。

プロフィンテルン第5回大会(1930年)後、多くのインターコムが外国に逃れ、ソ連にはビューロー組織のみが残ることになる。だが、ドイツ社会民主党政権樹立後、多くのインターコムがソ連に戻った。しかしながらインターコムの活動は、プロフィンテルンの自己解散状況により、活動停止状態に追い込まれる。ただし、すべてのインターコムは、ほぼひとつの組織機構を持ち、緊要の活動に関して協力している。だが、ついに1936年8月20日に、全連邦労働組合中央ソヴェト(VTsSPS)⁸の幹部会により、インターコムの活動停止が決定され、その後の国際活動活性化のため、国際連絡ビューロー(BiSyi)が作られる。そのBiSyiの活動は、1938年1月29日のVTsSPS幹部会会議決議による解体まで続けられている。

要するに、国際クラブ、国際委員会は、統一労組などの共産党系労組作りのための連絡組織だった。結成のイニシアチブはプロフィンテルンである。結成以後、階級対階級戦術、統一戦線戦術などのコミンテルンの戦術の変化に翻弄されることになる。コミンテルン第7回世界大会における統一戦線戦術・人民戦線戦術の採用で、プロフィンテルン自体の存在価値がなくなることにより、国際委員会も役目を終え、連絡ビューローとしての組織存続を図るが、それも解散に追い込まれることになる。結成はプロフィンテルンが主導したが、解散の主導はVTsSPSがとっている。

荻野不二夫編・解題『特高警察関係資料集成』所収の国際海員クラブに関する特高警察の外事警察史料、特に「昭和六年中ニ於ケル外事警察概要」(荻野1992b:1-91)では、組織概略図を付けて、国際海員クラブの現況が詳しく紹介されている(「第3章露領内に於ける対邦人赤化宣伝、第1節浦塩に於ける対邦人赤化宣伝、第2款国際海員倶楽部の近況」)。他にも、国際海員クラブの指導者、活動家、さらにはソ連水域の漁場における赤化宣伝工作の概要が記されている。

このうち、「第3章露領内に於ける対邦人赤化宣伝、第2節北樺太、堪察加方面に於ける対邦人赤化宣伝、第4款露領漁場及北樺太に於ける邦人宣伝員名簿」中に、ムヘンジャンと思われる人物＝「花井某」の記述がある。それによれば、「年齢34才位、出身地福岡、船員ニシテ裏汐ニテ脱船、入露倶楽部日本人部主任ノ林ノ紹介ニテグループニ加盟労働運動学校ニ入学ス非黨員ナリ」とある。ムヘンジャンは、出身地が福岡で、ウラジオストクで脱船の経歴もあり、さらに1896年生まれで、この報告が書かれた昭和6年(1931年)時点で35才であるから、年齢的にもこの記述の人物と合致する。

ウラジオストクでムヘンジャンに関係した人物達には、以下の者たちがいる。「かんじょ」、「バザロン」、「寺田」、「上田」、「井上」、「川井とその妻」、「石田」、「福田」、「山田夫妻」、「山口」、「キン」、「山崎」、「岡本」、「ヴォルカ」、「ミウラ」(前掲の健物貞一と思われる)である。このうち、「かんじょ」の前島武夫は、肅清時期が早く、ほとんど資料がない犠牲者といわれている。「バザロン」は寺島儀蔵、「寺田」は日本側特高記録では、ウラジオストク国際海員クラブ指導時の高谷覚蔵の党名である⁹。

【4】モスクワでの活動

1933年から1935年まで、ムヘンジャンは、KUTVに学んだ。そのためにウラジオストクの組織からモスクワに派遣される。派遣経緯の詳細はわからないが、すでにウラジオストクでKUTV入学が決め

られていたようである。ウラジオストクからモスクワへの旅行に、中国人同志二人と朝鮮人同志一人が同行した。

そしてモスクワに到着し、KUTV 入学の際に、出生地、年齢、社会的身分についての自らに関するウソの情報を与えた。父が労働者で、いつ彼が旅館のオーナーになったのかを伝えた。先にモスクワにいた寺田とは悪い関係のまま、KUTV 入学時の面接官となった寺田に、ムヘンシャンが出生地、経歴について尋ねられた際に、ウソをついてしまったことを認めている。寺田に対するやっかみもあって、ウソをついてしまったのかもしれない。このことについてはさらに、自分自身の政治的レベルが低かったことから起こったのだと自己批判している (LL.7-12.)。

モスクワでの生活のエピソードの一つとして、軍事パレードを見学に行き、逮捕されたことを明かしている。また、KUTV での勉強中の経験として、実践の一環で「クラスヌィ・プロレターリー (赤いプロレタリア)」工場、織物工場、さらにマグニトゴルスクの工場で働いた。「クラスヌィ・プロレターリー」工場では、トロツキスト、スパイのように見なされ、監視下に置かれ、疑われ、半狂乱の状態になった。

KUTV での生活だが、成績は悪かったという。本人がそのような証言している。その理由は、粛清が身近に迫っていると感じていたからである。当時、粛清による恐怖を体験し、それにより学業に集中することができなかつたらしい。

特に生い立ちに関し、父親の職業を偽ったことで、追及されることを心配した。「1936年から1937年に内務人民委員会 (NKVD、後の KGB 国家保安委員会) の機関によるタナカとカンジョーの逮捕の際に、彼自身が、スパイと彼がうたわわれているようだと書いていたように、迫害の恐怖と迫害の過度の集中を経験した」とある (L.2.)。

粛清の恐怖を体験したものの、KUTV を卒業することができた。さらに KUTV 卒業後、民族植民地問題科学研究所 (NIINKP) で学業を続けた。NIINKP の入学 (入所) の経緯もわかっていない。だが素行については注目されていたのだろう。このことを受けてか、実際に NIINKP 人事部の「告発」を受けている (L.15, L.16.)。告発内容は、ムヘンシャンが夜外出し、一晩中帰らないこと、ムヘンシャンとタナカ、カンジョー、さらにはバザロンとの親交だった。

ただし「告発」文書は、タナカとの会話の後、夜の外出がおさまったことも同時に明かにしている。普通告発を受けたら、このように順調に学業を続けることはできないと考えられるのだが、ムヘンシャンは NIINKP には 1938 年末までいた。要注意人物として、NIINKP 人事部は、前述のようにムヘンシャンを「告発」したのだが、ムヘンシャンも、自身のことをオカノこと野坂参三に相談した。このことを受けてオカノは、ムヘンシャンを弁護する上申書を書いている (L.13.)。

オカノはこの上申書の中で、ムヘンシャンが「政治的には発達不十分であり、不誠実であり、ある程度普通ではない性格を持っている」と述べた上で、上層部のムヘンシャンの処遇に関する問い合わせに対し、ムヘンシャンを日本に派遣することを拒否し、単に派遣すれば、寝返って日本の官憲当局に彼がモスクワで知れたことすべてをぶちまけてしまう可能性があることを明かにしている。とりあえずはムヘンシャンを、「モスクワの出版所において植字工として利用すること」を進言し、それが理にかなっ

たことであると述べ、彼を再教育すべきだと主張し、彼が長い間無職の状態に置かれ、まさにこのことが彼に熱意を喪失させたと言っている。まさに絶妙な弁護といえるだろう。

ところで、ムヘンジャンが所属した NIINKP とは、どのような組織なのだろうか。NIINKP は、1936年に、KUTV の外国セクションをベースに、コミンテルン執行委員会の決定によって創設され、研究活動に従事し、コミンテルン執行委員会のために、分析資料を準備した。また研究部門、研究室（アラブ、アフリカ、インド、ペルシャ、トルコ、日本その他）を持っていた。おそらく NIINKP は、KUTV 以降の大学的な役割があったものと考えられる¹⁰。

1939年から1940年まで、ムヘンジャンは「革命のイスクラ」印刷所の植字工となった。そして1941年から1942年まで、外国語文献出版所の日本語編集部の校正係を務めた。外国語文献出版所とは、プログレス出版の前身である。プログレス出版の編集部でのムヘンジャンの活動もわかっていない。外国語文献の日本語への翻訳、日本語文献・書籍の出版がプログレス出版の役割だった。この機関は、公的機関ではモスクワ放送局と同様に多くの日本人がいた機関だった。

モスクワでムヘンジャンにかかわった人物として、以下の者たちが挙げられる。「オカノ」＝野坂参三（ムヘンジャンは野坂とはウラジオストク時代に既に知り合っている）、「タナカ」＝山本懸蔵¹¹、片山やす（もしくは安子、アフタヴィオグラフィヤの翻訳、放送局関係者）、チャン・スイジャン（同翻訳）、キム・ジャン（前述のように放送局に翻訳家として勤務）、「シネグラゾヴァ」、「ヴィトゥシュキン」（監視役か）、「バドマエフ」、「ヴァン・ピン」（同居人）、「マ・チン同志」（同居人）、「ヤクーシン同志」（ウジェリナヤに同行）。このうち、「ヴァン・ピン」は、「ヴァン・ピン同志の許可を得て」とあることから、同居しながらムヘンジャンを監視する監視役と思われる。

【5】モスクワ放送局入局

1942年からムヘンジャンは、ラジオ委員会（現在は、Gostelradio、国家テレビラジオ委員会、略称ゴステルラジオ）日本語編集部のアナウンサーとなった。アナウンサーに抜擢されたいきさつだが、彼がなぜ放送局に入ったのかわかっていない。もちろん彼の意志だけでこのことが実現するわけではなく、当然推薦があったと考えられる。日本語放送開始に関し、現在見つかった唯一の文書が、「G・ディミトロフに宛てた、コミンテルン執行委員会職員I・プリュシエフスキーの、日本語番組用ラジオ編集部創設に関する書簡、ウファ、1941年12月16日」である。

極東における尖鋭化した状況に際し、日本に関する次の組織的措置をあなたに提出し、検討・裁量を仰ぎます。1. 次の者たちからなる日本語番組用ラジオ編集部を作ること。a) プリュシエフスキー（編集長）、b) キム・ジャン（編集員）、v) 片山やす（アナウンサー）、g) キムギウン（翻訳者）、d) ムヘンジャン（写字、書写）[下線筆者]。注意：片山は現在フェルガンにいる。キムギウンとムヘンジャンはエンゲルス市にいる。2. 日本語のラジオ聴取をこの目的から組織すること。a) キム・ジャン、b) 片山やす。注意：日本国内でのラジオ聴取は、長波、中波で行われていることから、ラジオを聴取するための追加設備はすでに確立されている。2日間の活動で、東京はまだ聴取する

ことができている [以下略] (RGASPI, F.495-OP.74-D.622-LL.55-56.)。

これによれば、当初アナウンサーとされていたのが片山やすで、ムヘンジャン（ムヒンジャンと書かれている）は写字、もしくは書写という役割だった。これがどの様な役割なのか、詳しいことはわかっていないが、おそらく補助的な役割だったのだろう。この4人の体制が何らかの事情により変更を余儀なくされ、ムヘンジャンがアナウンサーとなった。

さらに、日付が1941年12月16日で、日本語放送開始の5か月前から準備がすでに行われていたことがわかる。このときモスクワは、大祖国戦争（第二次世界大戦のソ連での呼称）のモスクワ攻防戦の最中にあり、モスクワの官庁、その他はウラル山脈近辺の諸都市に避難していた。この文書の発信元もウラル山脈の麓にあるウファ市である。準備がウファで進められているということは、ウファから放送が行われたという可能性も浮上してくる。そうすると、冒頭に挙げたモスクワにおける放送局と野坂竜のエピソードは虚偽となる。もしかしたら、冒頭のエピソードはウファから戻った後のことだったのかもしれない。

日本語放送開始直後から終戦までの時期の状況、またムヘンジャンの在局中の活動（勤務態度）も、また業務内容（どんな番組に携わったのか）もわかっていない。ただし、オカノが先の弁明書でムヘンジャンのことを、「活動に関する評価は肯定的である。政治的發展は弱い。誠実な働き者である」と評価している。このことから、ムヘンジャンがまじめに勤務していたことが想像できる。

一方で、後述する岡田嘉子¹²を放送局に入れたエピソードからもわかるように、ムヘンジャンは自身の九州訛りをコンプレックスと感じていたようである。アナウンサーにとって致命的欠陥と感じていたのではないだろうか。ちなみに、片山潜の長女、片山やすが、時折アナウンサーを務めていたようだが、正式な職員ではなかったようだ。とにかくムヘンジャンは、第二次世界大戦中の日本語放送を、ほぼ一人のアナウンサー体制で乗り切ったといえる。

ちなみに、当時の日本では海外放送を聞くことは違法行為とされていたが、それでも手製のラジオで、僅かな人数だが、隠れてモスクワ放送を聞いていたという。だが、前述のような放送聴取工作が行われていた形跡はない。

ムヘンジャンという偽名についてだが、自分自身が付けた可能性が高いだろう。理由は「～ちゃん」という九州便が入っているからである。前述の史料では、ムヘンジャンではなくムヒンジャンとなっており、このことからムヘンジャンは、ハエ＝「ムーハ」の物主形容詞「ムーヒン」から作った造語であり、ムヘンジャンはもともとムヒンジャンだったことがわかる (RGASPI, F.495-OP.74-D.622-LL.55-56.)。

ただし、いつから「ムヘンジャン」を名乗っているのだろうか。放送局に入り、放送に登場することから名乗っていることが「伝説」となっている。しかしながら、NIINKPの告発となった前述の個人ファイル史料 (L.15.1937年12月2日付) から、1937年当時にはすでにムヘンジャンを名乗っていることになる。それでは何のためにこの偽名を名乗ったのか。前述したように日本人だと知られなくなかったからだろう。ならば、中国人名、朝鮮人名ではなく、独特の命名法をとったのはなぜだろうか。おそらく

くこれは、彼自身の自尊心の表れからだったのではないだろうか。

【6】モスクワ放送局退職以降

スブラフカ履歴書の日付が1945年7月4日であることから、この時点ではまだ放送局にいたことになる(L.2.)。やがて退職ということになるのだが、ムヘンシャンの退職がいつなのか、どうしてやめたのかがわかっていない。岡田嘉子によれば、岡田が放送局に入る前に、ムヘンシャンは岡田と会う機会があった。その際にムヘンシャンが、「自分は訛りがあるから、女優で、訛りのない日本語を話す」岡田にぜひ放送局に入って欲しいと述べ、岡田を推薦したらしいことが伝わっている。岡田嘉子が放送局で働き始めたのは1948年である。

ムヘンシャンは岡田嘉子と入れ替わりに、同時期に、相前後して、やめたのだろうか。いや、岡田嘉子をアナウンサーの仕事に慣れさせることが必要であり、このことから岡田と入れ替わりにやめたとは考えにくい。だが岡田嘉子によれば、岡田が入局した後、しばらくしてムヘンシャンの姿を見なくなったという。

ムヘンシャンは粛清問題にからむのだろうか。まず退職が粛清とからむことはあり得ない。岡田嘉子を放送局に入れて、岡田にアナウンサー業務の研修を受けさせることが必要だったからだ。だが退職後に粛清された可能性はある。いずれにせよ辞め方が気になる。粛清自体は、1930年代末（特に1937年から1938年）の粛清が有名だが、第二次世界大戦中は沈静化し、第二次世界大戦後に再燃し、1953年のスターリン死後まで続く。だから戦後のこの時期に、粛清の影響がなくなったということとはあり得なかった。むしろ再燃しており、ムヘンシャンが粛清されたことも十分考えられる。

それとも、ムヘンシャンは粛清とは関連なかったのだろうか。そして生き残ったのだろうか。それならば、なぜ生き残ったのか。この観点から史資料を読む必要がある。簡単に述べるならば、可能性として、偶然に残された、意図があって残された、用無しになり解放された、が考えられる。要検討材料は膨大にあり、早急に判断を下すことはできない。

ムヘンシャンが粛清を免れ、生き延びたとしたら、その後どうなったのだろうか。ありうるのは、ソ連国内で生活し続けたか、もしくは出国したことである。出国したとなると、可能性として最も高いのは日本への帰国である。いずれにせよ、退職後の消息は不明である。もちろんソ連当局が簡単に出国を許したことはありえない。日本国籍を捨てて、ソ連国籍を取得し、ソ連国内で残りの人生を全うしたことも十分考えられる¹³。

1954年当時の状況証拠として、ロシア国立近現代史文書館(RGANI, 略称ルガニ)で見つかった史料(RGANI, F.5-OP.28-D.191-LL.1-2.)がある。それによれば、1954年当時、モスクワ放送日本語課は、男性アナウンサーの清田彰と岡田嘉子の二人体制だったが、清田が病気、岡田嘉子が演劇大学に入学することで、アナウンス業務に支障をきたすようになり、満身に放送を行えず、オカノに代りのアナウンサーとなる人物を中国、日本で見つけるよう、ソ連文化省がソ連外務省に要請している。オカノはこれを確約している。このことにより、すでに1954年には、ムヘンシャンは放送局を去っていた。前述の岡田嘉子の話しと合せれば、1948年から54年までの間に放送局を辞めたようだ。

【7】 今後の課題

ムヘンジャンの軌跡を追う理由は以下にある。共産主義者の拠点であるウラジオストクにおいて、日本人が大勢いた国際海員倶楽部に在籍していたこと。粛清にからんだか、もしくは粛清のすぐ近くにいた人物で、つまりムヘンジャンが粛清を解き明かす鍵の一つになりえる可能性があり、さらには日ソ間の漁業活動など、戦間期の日ソ関係のあり方を解きほぐす可能性を持っているからである。しかしながら、調査不足は否めず、本論文はこれらの疑問に対する状況証拠を提出したにすぎない。

ムヘンジャン本人については、船員上がり、俄か活動家上がり、社会主義、共産主義についての知識はない。労働組合活動には参加したが、政党に所属したことはなかった。一所懸命勉強するタイプではなかった。だが努力家であった。誤解を受けやすいタイプ、気に入らない仕事はやらない、だが気に入れば一所懸命やる人物だった。人情家であり、義侠心があった。唯一の救いは、ムヘンジャンが誰かを追い落とした、「はめた」という事実が今のところはおいてこないことである。まっすぐな生き方がうかがえる。

モスクワ放送は、長らく謀略のための放送とみなされてきた。冒頭にゾルゲ事件と表裏一体をなすものとしたが、本当にゾルゲ事件との関連はあるのだろうか。ゾルゲの上司にあたるソ連国防軍諜報部との関係を突き詰める必要がある。モスクワ放送日本語放送開始に至る経緯は、前掲史料以外、わかっていない。だがスターリンからコミンテルン書記長ディミトロフ、そしてオカノへの命令の流れによって開始されたことも考えられる¹⁴。日本語放送開始の経緯を、さらに詳細につかむ必要がある。

今後の課題として、未調査の史料にあたるものがまず挙げられる。ロシア国立連邦文書館（GARF、略称ガルフ）の史料では、特に国際海員倶楽部を含むインターコム、インタークラブ、食品産業労働組合、革命のイスクラ出版所、外国文献出版所など、関連する史料の徹底調査が必要である。

ウラジオストクの活動については、ウラジオストクの文書館、もしくはウラジオストクの史料の移転先であるカザフスタンの文書館への史料調査も行わなければならない。ウラジオストクから史料が移転したままで、ウラジオストクに戻らないままになっているという。またウラジオストク以外の日本セクションに関しても、調査が必要である。

2009年9月に、GARFの国際海員クラブのウラジオストク関連史料を調査したところ、日本人の活動をうかがわせるものはあるが、手紙などのやり取りはなかった。小手調べの調査だったため、本格的な調査が必要である¹⁵。

RGASPI関連では、KUTVのフォンド、KUTVの雑誌『革命的東方』、民族植民地問題科学研究所フォンドの史料調査が必要である。KUTVとNIINKPは、孫逸仙記念勤労者中国人共産主義大学（KUTK）、西方少数民族共産主義大学（KUNMZ）、そして国際レーニン学校（MLSh）などとともに、共産主義大学（KOMVUZ、略称コムヴァス）教育システムの環をなすものである。

他の人物との関係では、個人ファイル、その他の調査が必要である。山本懸蔵、その他も調べなければならない。手元には、片山やす、野坂竜、高谷覚蔵らの個人史料ファイルのコピーがあるが、それらにはムヘンジャン関連の情報はない。

オカノこと野坂参三のファイルは、RGASPIで分類され、RGANIにあるということになっているが、

実際に RGANI に行ったところ、そのようなファイルはないということだった。要するに一般非公開の状況であり、いずれ RGASPI に史料が移転され、一般公開されることが求められる。

放送局関連では、まだ調査していないアルヒーフ・ゴステルラジオフォンドという文書館があり、ムヘンシャン関連史料が存在する可能性がある。

日本側の史料としては、脱船後の身元調査依頼の内容、その後の対応が未追跡のままである。これによって、日本側がムヘンシャンを、書類上だが、どのように扱ったのかわかる。また、日本海員組合（現、全日本海員組合）の史料、船員としての活動の調査、船員時代の労働運動の参加状況が知りたい。さらには船員時代の記録（船員記録、船の船籍、各船会社の記録）も調べる必要がある。

デリケートな問題だが、日本での遺族探しは最も重要である。名誉が失われているのならば、名誉回復、顕彰作業も行わなければならない。外務省関連では、出入国記録の調査、さらにはパスポート（旅券）再発行の記録も見たい。これは、日本に帰国する際に在外大使館で発行されるパスポートに関するものであり、これにより帰国したかどうかがわかるだろう。

前述のように、RGASPI の岡田嘉子のファイルでもムヘンシャン関連は何もなかった。ただ岡田嘉子については、日本側でも注目しており、その動向に関連した報道が行われていた。プランゲ文庫関連史料でも、岡田嘉子に関するものが多く見受けられる。ムヘンシャン関連の状況証拠としてはつかんでおきたい。戦後史では、ソ連共産党国際部との関係も欠かすことはできない。

おわりに

2009年4月にロシアの声放送は、モスクワ放送日本向け放送開始67周年を記念し、私の提供したわずかな史料をもとに、ムヘンシャンに関する記念番組を制作、電波に乗せた。記念番組の最後に、日向寺康雄チーフ・アナウンサーは次のように述べた。「私も、ムヘンシャンさんは、緒方さんは、日本に無事に戻り、故郷で、きっと、モスクワ放送を聴いていた、そう考えたいと思います」¹⁶。

私もそう考えたいが、正確なところはわからない。これからの調査が待たれるところである。だが私や日向寺氏の希望と、現実とは全く異なるのかもしれない。そうだとすると、歪曲することなしに、ムヘンシャンの軌跡をたどる。事実をありのままに伝えることが重要である。

謝 辞

モスクワにおける資料調査の一部は、科研費（19201053、研究代表者村嶋英治）によって実施した。

参考文献

史料

RGASPI 史料：

ムヘンシャン緒方重臣に関する個人ファイル史料：

F.495-OP.280-D.271.

L.2: スブラフカロシア語履歴書（ロシア語）

LL.3-4: スブラフカロシア語履歴書（ロシア語）

LL.5-6: ロシア語アンケートリスト（写真つき、ロシア語）

LL.7-12:「ウラジヤストクでの私の生活」(ロシア語,「日本語からの翻訳」とある,1939年4月13日付,ロシア語)
L.13:「ムヘンシヤンに関して」(オカノ署名,1939年3月13日付,1939年3月20日付,ロシア語)

L.14:「ムヘンシヤンに関して」(同英語)

L.15:「民族植民地問題科学研究所人事部長ヴァリドマン同志に宛てたシネグラゾヴァの報告的メモから」(1937年12月2日付,ロシア語)

L.16:「ムヘンシヤンに関するヴィトウシュキンの知らせから」(1937年12月8日付,ロシア語)

LL.17-28:「アフタヴィオグラフィヤ ムヘンシヤン,本名 オガタシゲオミ」(日付無し,文末に「カタヤマ・ヤス」の翻訳とある,ロシア語)

ディミトロフ小書記局史料:

RGASPI, F.495-OP.74-D.622-LL.55-56. 但し, *VKP(b), Komintern i Yaponiya, 1917-1941*, M., 2001, s. 711. からの再引用。

健物貞一に関する個人ファイル史料:

RGASPI, F.495-OP.280-D.188-L.6.

RGANI 史料:

1954年当時の放送局の状況に関する史料:

RGANI, F.5-OP.28-D.191-LL.1-2.

日本外務省外交資料館史料:

緒方重臣関連史料:

外務省外交資料館>外務省記録>F門・交通,通信>1類・交通>2項・海員>本邦汽船乗組海員脱船其他事故案件・第一巻,浦塩ニ於テ脱船シタル船員ニ関スル件

日本語文献

荻野不二夫編・解題(1992a)『特高警察関係資料集成』不二出版,15巻,16巻(荻野1992b),17巻(荻野1992c)

加藤哲郎(1994)『モスクワで粛清された日本人』青木書店

加藤哲郎(2008)『ワイマール期ベルリンの日本人』岩波書店

川越史郎(1994)『ロシア国籍日本人の記録』中公新書

シードロフ, A. Y. (2007)「ロシア・アルヒーフの現状と問題点」『インテリジェンス』(島田顕訳,第008号,4月)124-134頁

島田 顕(2002)「史料紹介 モスクワのコミンテルン史料—スペイン内戦関連文書の現状」『大原社会問題研究所雑誌』No.525,8月,35-49頁

富田 武(2010)『戦間期の日ソ関係 1917~1937』岩波書店

ロシア語文献

Butovskiy poligon, 1938-1938gg., Kn. Pamyati zhertv polit. Repressiy, Vyip. 3, M., 1999, s. 73.

VKP(b), Komintern i Yaponiya, 1917-1941, M., 2001, s. 711.

RGASPI, Putevoditel' po fondam i kolleksiyam dokumentov KPSS, Cpravochno-informatsionnyie materialy, M., 2008, s. 330.

ホームページ

加藤哲郎のネチズン・カレッジ HP:

<http://www.ff.ij4u.or.jp/~katote/Homef.html>

ロシアの声ホームページ:

<http://www.wrn.org/listeners/stations/station.php?StationID=25>

<http://www.ruvr.ru/index.php?lng=jap>

モスクワ放送日本向け放送開始67周年記念番組内容(日本BCL連盟幹部の細谷正夫氏のBCLブログ):

http://blogs.yahoo.co.jp/swl_information/15048101.html

注

1. 短波,中波での放送が主だが,現在ではインターネットでも日本語を含む各国語の番組を聞くことができる(<http://www.wrn.org/listeners/stations/station.php?StationID=25>)。また日本語HPも設けている(<http://www.ruvr.ru/index.php?lng=jap>)。
2. ロシア文書館事情については,拙稿(島田2002),シードロフ論文(シードロフ2007)を参照されたい。

3. F. (フォンド, 文書庫番号), OP. (オーピシ, 目録番号), D. (ジェーラ, ファイル番号), L. (リスト, 文書番号) は, ルガスピその他のロシアの文書館における史料分類整理番号のことである。
4. 文末にムヘンジャンの個人ファイル史料リストを示した。
5. 別名ササキ・三浦。明治 33 年(1900 年)6 月 5 日岡山県生まれ。早稲田大学商学部を出て, 大正 12 年(1923 年)7 月にアメリカに渡り, 翌年アメリカ共産党に入党, 太平洋岸の日本人共産主義者グループのリーダーとなる。昭和 1 年(1926 年)6 月, サンフランシスコ国際労働擁護会 (ILD) 機関紙『階級戦』を創刊し, 同年『労働新聞』と改称し編集。昭和 4 年(1929 年)12 月 25 日にサンフランシスコで逮捕される。アメリカから国外追放になり, 昭和 6 年(1931 年)12 月 16 日ドイツ經由ソ連に出国, 翌 1932 年 1 月ソ連に出国。モスクワの国際レーニン学校もしくは KUTV で学び, ウラジオストク付近で汎太平洋労働組合書記局, 赤色救援会(モップル)で活動。1932~36 年ウラジオストクの海員クラブで活動, 1936 年モスクワに入りモスクワ第 9 印章工場で労働, 1938 年 4 月 15 日「日本のスパイ」として逮捕され, 1939 年 6 月 9 日ラーゲリに送られ, 1942 年 9 月 8 日マガダンの収容所で死亡(加藤哲郎のネチズン・カレッジ HP 内, 旧ソ連日本人粛清犠牲者・候補者一覧)。
6. 例えば, モスクワのプトヴォ練兵場(処刑場)で処刑された朝鮮人の粛清犠牲者の一人であるゴ・ウンの略歴には次のように記されている。ゴ・ウン, 1910 年朝鮮巨済市生まれ, 朝鮮人, 農民 [の家庭] 出身, 非党員, 中等教育 [修了], 第 7 印刷所植字工, モスクワ, カペリスキー横丁 13 番地 6 号室に住む。1938 年 1 月 12 日に逮捕された。NKVD・ソ連検察委員会により, 1938 年 3 月 27 日付で, ソ連国境の非合法越境と日本偵察に利するスパイ組織, スパイ活動のかどで極刑一銃殺刑が宣告される。1938 年 4 月 5 日に刑が執行された。1957 年 10 月 7 日に名誉回復された [下線筆者]。Butovski poligon, 1938-1938gg., Kn. Pamyati zhertv polit. Repressiy, Vyip. 3., M., 1999, s. 73.
7. 富田武は, 戦前の日ソの漁業交渉について詳しくまとめている(富田 2010)。また富田教授から, RGASPI, GARF, RGANI などのロシアの文書館事情, 戦前のソ連の国内体制その他についての教示を受けた。
8. ソ連国内の労働組合の中央統合組織である。労働省の役割を担っている。
9. これらの人物については, (加藤 1994) を参照されたい。また加藤教授から, 日本人活動家に関する教示を受けた。
10. これについては, RGASPI のガイドブック「プチェヴァヂーテリ」(*Putevoditel' po fondam i kollektivyam dokumentov KPSS, Cpravochno-informatsionnyye materialy*, M., 2008, s. 330.) を参照されたい。
11. 明治 28 年 2 月 20 日生まれ。大正・昭和時代前期の労働運動家。茨城県出身。大正 7 年(1918 年)米騒動で群衆を指揮し逮捕される。11 年(1922 年), 共産党に入党。14 年(1925 年), 日本労働組合評議会結成に参加。昭和 3 年(1928 年), 三・一五事件でソ連に亡命, 以後同国で活動。スターリン粛清で逮捕。昭和 14 年(1939 年), 3 月 10 日銃殺。31 年(1956 年)名誉回復された。
12. 明治 35 年(1932 年)4 月 21 日生まれ。広島県広島市出身, 女優。大正 12 年(1923 年)に日活の「髑髏の舞」で映画に初出演。舞台, 映画で人気を博した。昭和 13 年(1938 年)1 月 3 日に, 演出家で恋人の杉本良吉とともに樺太(サハリン)国境をこえ, ソ連領内にはいる。スパイ容疑で拘束されるが, のちソ連市民権を獲得。昭和 22 年(1947 年)に釈放, 同年よりたびたび里帰した。平成 4 年(1992 年)2 月 10 日死去。杉本良吉は昭和 14 年(1939 年)10 月 20 日に銃殺, 昭和 34 年(1959 年)10 月 15 日に名誉回復を受けている。
13. 本論文で取り上げたバザロン・ダーシャこと寺島儀蔵や, シベリヤ抑留以降ソ連で生活した川越史郎など枚挙に暇がない。ちなみに川越は, 岡田嘉子など戦後期のソ連における日本人社会と関係があった。だからモスクワ放送, プロGRESS 出版内部の事情に詳しい(川越 1994)。
14. RGASPI のディミトロフ小書記局の日本関連文書 (F.495-OP.74-D.616-623.) の 8 つのファイルのうち, 一般公開されているものは次の 3 つだけで, それ以外は, 前掲の日本語放送開始に関する史料 (RGASPI.F.495-OP.74-D.622-LL.55-56.) を含めて, 一般非公開である。F.495-OP.74-D.618: 日本におけるアメリカの偵察エージェントの報告『日本における過激傾向』, 日本における状況, 日米戦争開始に向けた日本陸軍の構成, ソ連に対する軍事的準備に関する労農赤軍 [ソ連国防軍] 参謀本部情報総局の特別報告, 1939 年 12 月 21 日から 1941 年 12 月 16 日まで。F.495-OP.74-D.620: ソ連に対する出撃に向けた日本の準備, 太平洋(満洲の軍事地図を添えて)における状況に関する労農赤軍参謀本部情報総局の報告と展望, 1942 年 2 月 26 日から 6 月 30 日まで。F.495-OP.74-D.621: 労農赤軍参謀本部情報総局の資料, 日本警察の現在の秘密往復書簡に関する報告, 満洲における反日運動と懲罰機関の活動に関する報告, 日本共産党中央委員会の文書「日本共産党活動報告の要点」, 1942 年 8 月 11 日。
15. ウラジオストク, カザフスタンの文書館事情については, 和光大学のユ・ヒョジョン教授から教示を受けた。
16. モスクワ放送日本向け放送開始 67 周年記念番組の内容は, 日本 BCL 連盟幹部の細谷正夫氏の BCL ブログを参照されたい。(http://blogs.yahoo.co.jp/swl_information/15048101.html)